

国立国語研究所学術情報リポジトリ

平成15年度日本語教育上級研修

雑誌名	日本語教育論集
巻	20
ページ	63-64
発行年	2004-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1328/00001891/

平成15年度日本語教育上級研修

1. 目的

「日本語教育上級研修」は、広く日本語教育に関する職務に携わっている現職者を対象として、「多様化」に現実的に対応し得る人材の養成を目指し、平成13年度より新たにスタートしたプログラムである。

具体的には、様々な立場の現職者が集まり、各自の現場で見いだした問題を出発点として、その現状を分析的に把握し、問題意識を深め、各自が課題として取り組むことを通して、日本語教育改善のための視点・専門的知識・能力を身につけることを目的とする。

さらに、研修参加者は、参加者同士の共同作業や相互交渉を通じて、自らの日本語教育を様々な視点からとらえ直し、各分野における協力体制の構築と、分野を超えたネットワークが広げられる人材となることを目指す。

2. 期間

平成15年5月10日～平成16年3月12日

3. テーマ

「教育内容の改善・教育環境の整備のための方法」

上記のテーマのもと、各々が日本語教育現場における実践・研究等から見いだした具体的課題を追求する。

4. 募集対象

(1) チーム応募

原則として2～5人の研修チームを構成して、上記3.のテーマに関連する課題を設定し、応募する。

(2) 個人応募

上記3.のテーマを追求するために15年度は「授業の観察と分析」を課題とする。個々に重点的に追求する分野・側面等を副

題として設定し、個人で応募する。個人単位の応募であるが、「授業の観察と分析」を共通課題として、個人参加者によるグループとして研修活動を行う。

5. 研修概要

＜研修の基本方針＞

(1) 本研修では、以下の2つを柱として活動を行う。

① 相互交渉・共同作業をとおして、自らの課題を追求する。

② 他者との連携のために、情報の収集・発信・共有等の方法を模索し、実践する。

(2) 本研修は、チーム応募、個人応募にかかわらず、個人を研修生として受け入れるものとする。

(3) 研修生は、国立国語研究所内外の人的及び物的なリソースやネットワークを積極的に研修活動に活用する。研修活動が円滑に進むよう、研修担当者は活動の内容や方法に関する助言、リソースの提供等必要な支援を行う。

＜研修活動の内容＞

(1) 研修生は国立国語研究所の研修担当者との間で、原則として毎月1回、定例会合を持つ。会合は原則として国立国語研究所で行う。チーム参加の場合、具体的な日時を研修チームと研修担当者との調整によって決定する。個人参加者のグループの場合、定例会合は原則として第2金曜日に実施する。定例会合では、それぞれが進めてきた文献研究、情報収集、計画案の作成、データ収集、実践的検討等の結果報告を受けて、次の活動の進め方について研修担当者とともに検討する。なお、研修スタッフは第2金曜日に隣接する土・日曜日に、必要に応じて外部講師等による研修レクチャーを開

催する。

(2)研修生は、チームごとに、あるいは共同で、以下のような会を企画・実施する。

①課題に関する自主研究会等（研修の進行にあわせて随時実施）

②中間発表会（公開）

③修了報告会（公開）

(3)研修生は、以下のものを作成し、提出する。

①定例レポート：研修活動の進行にあわせて定期的（月1回程度）に作成し、活動の進捗よく状況等についての内省・共有・検討のために利用する。

②修了レポート：研修成果をまとめる。

③ダイアリー：研修の活動を通じ、「学んだこと・考えたこと・感じたこと」をダイアリーにまとめる。個人別に自由に記述し、定期的に提出する。定期的な記録・読み返し・分析により、問題点の発見・改善に役立てる。

6. 全体の経過

5月10日：オリエンテーション・研修課題発表

* 定例会合・メーリングリスト等の開始

9月13日：中間発表会

2月13日：修了レポート提出期限

3月8日～23日：修了面接

3月5日：修了生修了通知

（2チーム7名・個人1名）

4月17日：修了式・修了発表会

レクチャーシリーズ

5月10日

第1回：「これからの日本語教師に求められること」尾崎明人氏（名古屋大学）

5月17日

第2回：「なぜ授業観察・授業分析か？」
金田智子氏（国立国語研究所）

6月14日

第2回：「なぜ授業分析か？その2」

文野峯子氏（人間環境大学）

7月12日

第4回：「日本語教育における実践研究—
観ること、聴くこと—」林さと子
氏（津田塾大学）

7. 修了レポート

<チーム参加>

(1)「黒崎チーム」黒崎亜美・黒崎誠・播岡
恵・宮木麻子（ラボ日本語教育研修所）

題目：「中級前半の作文指導—「文作」から
「書く」へ—

(2)「ぐるぐるチーム」正田桜子・迫脇宏美
（システム桐葉外語専門学校）・中村雅子
（カイ日本語スクール）

題目：「学習者の自発的発話を引き出す為
の考察」

<個人参加>

(1)伊藤とく美（横浜簿記テクノビジネス専
門学校）

題目：「授業に見られる学習者の自発的発
話の諸相」

（記：小河原）